

「このような経験や体験が積み重なり、気づけば自分の力で再生可能エネルギーのDNAを埋め込んだそうだ。」

オーナーの山崎さんはこのツェルマツト村に100回以上通い詰め、融解していく氷河と向き合いながら、再生可能エネルギー発電によってエネルギーの地産地消を実践している地元の人々の姿から多くのことを学び、サステイナブルツーリズムのDNAを埋め込んだそうだ。



ホテルオーナーの考える“サステイナブルツーリズム”とは

“サステイナブルであること”に徹底してこだわっているのはホテルオーナーの経歴が関係している。ウイスキーホテルのオーナーである山崎一徳(やまよせかずのり)さんは元エンジニアという異色の経歴の持ち主。エンジニア時代は環境問題に関わる商品のプロトタイプ開発を手掛けながら、イギリス、ドイツ、イタリアなど欧州で8年間海外生活を過ごし、さらに米国シリコンバレーでスマートシティ分野の新規事業開発に携わっていたそうだ。もともと環境問題に関わる商品を開発していたため、環境保護の意識は高かったが、海外生活を通じて環境問題に対する欧州の考え方や取り組みを目の当たりにし、日本とのギャップに衝撃を受けたという。たとえば、サステイナブル・リゾートとして注目されているマッターホルンの麓に位置するツェルマツト村は、ガソリン車やディーゼル車などCO2を排出する車の乗り入れが禁止されている。村内は電気自動車の乗り入れしか認められていないが、ツェルマツト村の人々はそれによって生じるコストや不便さを受け入れ、確固たる意志で環境と観光資源を守っているのである。

オーナーの山崎さんはこのツェルマツト村に100回以上通い詰め、融解していく氷河と向き合いながら、再生可能エネルギー発電によってエネルギーの地産地消を実践している地元の人々の姿から多くのことを学び、サステイナブルツーリズムのDNAを埋め込んだそうだ。

「このような経験や体験が積み重なり、気づけば自分の力で再生可能エネ



ルギーをつくり出し、さらにはサステイナブルなスマートシティをつくりたいと考えるようになっていきました」と語る山崎さん。そして、金沢の主要産業である観光業からサステイナブルな街づくりを——という発想でウイスキーホテルの開業に至ったという。

滞在する人がストレスフリーに過ごせる環境を提供

ウイスキーホテルはファミリーユーザーを意識してつくられているのだが、そこにも四人の子を持つ山崎さんの体験から得た気づきが反映されている。山崎さんは海外赴任中に家族であちらこちへ出かけ、海外のホテルに500泊以上宿泊したという。だが、一人、二人と子どもが増えるにつれ、旅先のホテルでストレスを感じるが多くなったそうだ。なかでも最もストレスに感じたのが、国内外のほとんどのホテルで標準的である土足の客室だったという。風呂上りに子どもたちにスリッパを履くよう促しても、当然聞き入れてはもらえず、靴を脱いであがる部屋が良いと痛感したそう。もちろん旅館であれば問題ないのだが、やはり布団ではなくふわふわのベッドで休みたいもの。

そこでウイスキーホテルは靴を脱いであがる仕様にし、全客室にベッドを設置。子どもが小さいとベッドからの転落が気掛かりだが、可動式のベッドを採用しているためベッドを繋げたり、壁につけたりして安全に使うことができる。また、転んでしまえば泥だらけに、というトラブルも起こりうるため乾燥機つきの洗濯機を完備。さらに専用キッチンも設置されており、幼児用セット(ベビーベッド、補助便座、おむつ入れ)や介護用シャワーチェアの無料貸し出しも行っているそうだ。

セルフチェックインシステムなど、人的サービスを削減していく取り組みにネガティブな反応がないわけではない。だが、「おもてなし」のスタイルこそ違えど、心地よく過ごしてもらいたいという、おもてなしの精神はそこかしこに溢れている。「私たちの考えに共感する人に泊まって欲しい」と山崎さんは語っていたが、2022年8月度の稼働率は90%を超えており、日本においてもサステイナブルツーリズムに共感する人が増えているのだらう。

Weskii Hotel

Tel.076-231-0708
石川県金沢市広岡1丁目14-6
<https://weskihhotel.com>

ウイスキーホテル 検索

Weskii Lab

ウイスキーホテルのグループ事業「ウイスキーラボ」はキッズルーム英会話教室を併設したコワーキングスペース。専門の英会話教師が常駐しており、中国語・スペイン語・フランス語など多言語対応も可。利用者は地元の人がほとんどだが、ホテル宿泊者も突発的な仕事やワーケーション、子どものリフレッシュや気分転換を目的に1時間単位でドロップイン利用できる。



Sustainable tourism



これからの時代、求められるのはサステイナブルツーリズム

金沢のラグジュアリーコンドミニアムで

サステイナブルなおもてなしを



日本は2030年までに訪日外国人観光客を年間6000万人にまで引き上げることを目標に掲げている。だが、はたして従来の観光産業の在り方で実現することができるのだろうか。これまで日本の観光業界では「おもてなし」こそが日本人の美徳であり、誇るべき日本文化だと考えられてきた。もちろん、至れり尽くせりの人的サービスが素晴らしいことに間違いはない。だが、少子高齢化によって人手不足が深刻化するなか、従来のおもてなしを追求し続けることがはたして正解なのか。「おもてなし」という名の人的サービスにこだわり続けることは観光産業に従事する人々やその地域の負担を増やし、その結果としてゲストが享受すべきサービスの低下にも繋がりがかねない。

2019年12月、金沢にサステイナブルツーリズム(持続可能な観光)をコンセプトとするラグジュアリーコンドミニアム「ウイスキーホテル」がオープンした。ウイスキーホテルはサービスの軸を従来のおもてなしから、テクノ

ロジーによる利便性に置き換えることで省人化を実現。地域住民や地元の伝統工芸、さらには環境にも配慮しながら持続可能な観光産業を目指している。

省人化と地域に根差した取り組みによる持続可能なホテル運営

まずフロントには24時間セルフでチェックイン/チェックアウトできるIoTシステムを導入。このシステムは英語・中国語・韓国語など、多言語対応しており、チェックインから支払い、カードキーの受け渡しまですべて非対面で完結することができる。

また、ホテル内には金箔シャンドリアなど、金箔デザイナーの作品を多数展示しており、客室には地元メーカーの金箔コスメセットがプチギフトとして用意されている。金沢の伝統工芸である金箔を世界に発信したいという想いから、地元企業とさまざまなコラボレーション企画を実施しており、将来的にはアンテナショップのようにホテルを活用してもらおう考えもあるそうだ。

さらにウイスキーホテルは金沢市内にある中小規模のホテルでバーチャルなホテルグループをつくる取り組みを進めている。本来は競合関係にある地元のホテルオーナー達が手を組み、ローカルだからこそ知り得る情報やサービスを宿泊客に提供するとともに、広告や予約管理、情報発信などのバックオフィス機能を集約することで業務負担を軽減し、競争力を高めていくのが狙い。大手資本のホテルだけでなく小規模なホテルも生き残れる、持続できる仕組みをつくりあげていきたいと考えているそうだ。



そしてサステイナブルツーリズムのコンセプトに基づいた取り組みのなかで、最も注目したいのは環境への配慮である。驚くことにウイスキーホテルは自社で再生可能エネルギー発電所を保有しているのだ。現在、技術開発中のため、現状は発電した電力をそのままホテルで使用しているわけではないが、ホテル使用分に相当する電力を太陽光で発電しており、実質的にカーボンニュートラルなホテル運営を実現しているのだらう。